

もくじ

- P.1 私たちもコロナとたたかっています ー各国修了生からの報告ー
- P.6 2019年度 修了生福祉活動助成事業報告
- P.8 第37期アジア社会福祉従事者研修、修了生フォローアップ研修の中止
- P.8 国際交流・支援活動会員制度のご案内

私たちもコロナとたたかっています ー各国修了生からの報告ー

新型コロナウイルス（COVID-19）による感染症は、アジア各国においても深刻な影響をもたらしています。アジア社会福祉従事者研修の修了生の皆さんも、自国で感染症に向き合いながら、それぞれが担当している事業の運営、利用者のサポートをはじめ、困難な状況に陥った地域住民の支援などに取り組んでいます。

国際部では、5月に、各国の修了生へアンケートを送り、新型コロナウイルス感染症で生じている影響や課題、それらへの取り組みについて聞き取りを行いました。また、今年の修了生福祉活動助成事業の助成対象者10名に対し、活動する地域の状況やプロジェクト実施への影響について照会を行いました。6月には、所属組織での仕事の状況などについて、7名の修了生に動画の収録を依頼し、映像レポートを送っていただきました。

今号では、これらの情報をもとに、各国の修了生のコロナとの取り組みについてご報告します。

マレーシア



アイナ

ビバリー

各国の状況は令和2年8月7日に確認した内容です。（以下同様）

マレーシアでは8月6日現在の感染者数は9,023名です。3月から活動制限令（MCO = Movement Control Order）が発令され、移動には多くの制約が課されました。移動距離や他者の同伴の制限、地区間の道路封鎖は厳重に監視され、警察官への許可証の提示（許可証がない場合は約2万円の罰金）のほか、州をまたぐ移動には最寄りの警察署への相談が必要だったといえます。6月10日以降は、“回復のための活動制限令（RMCO = Recovery MCO）”が8月末まで発令されています。

（在マレーシア日本国大使館ホームページより）

アイナさん（9期）は、ペナンで障害者の地域生活支援等に取り組んでいます。活動制限令によりすべての事業所が閉鎖となり、家庭訪問や職業ワークショップなどが中断しました。知的障害のある人の多くは、在宅で働かずにご過ごすことに苦勞し、家庭で子どもの世話をすることが難しい家族もいます。知的障害のある人にとっては、オンラインでのコミュニケーション対応は困難で、連絡は家族との電話のやりとりに限られているといいます。

ビバリーさん（32期）は、ペナンパンで青少年のトレーニングセンターを運営しています。寄宿制のため、研修生（トレーニー）は一旦家に戻りました。フェイスブックで情報を提供したり、ワッツアップ（WhatsApp）などのSNSを利用したオンライン授業に取り組みましたが、インターネット接続が難しい村の出身者も多く、授業ができない状況もあります。研修生の家族には、コロナの影響で職を失い、食料などの必需品の購入が難しい家庭もあるといいます。

研修生もずっと家にいることで他の人と会ったり話したりする機会が減り、学習意欲が減退します。センターから各家庭に電話して、家族から研修生の様子を聞き取ります。連絡を入れることが本人や家族の安心につながった、といいます。ビバリーさんの映像レポートもご覧ください。

ビバリーさん映像レポートより



青少年トレーニングセンター。今は生徒がいない

フィリピン



ジュリエット



カッチ



イメルダ



エナ

フィリピンはアジアでは感染者数が多い国です。8月6日現在の感染者数は119,460名です。政府は、コミュニティ隔離措置を、強化された措置 (ECQ = Enhanced Community Quarantine)、および一般的な措置3段階 (GCQ、MGCQ、低リスク) の4区分で運用しています。ECQでは、21歳未満の者、60歳以上の者、免疫不全の者、妊娠中の者、およびこれら症状のある者と同居する者を外出禁止としています。8月4日から18日までマニラ首都圏ほかの地域で修正を加えたECQが課されています。(在フィリピン日本大使館ホームページより)

第36期生のジュリエットさんは、2月の研修修了後に帰国した際、日本から戻ったということで周囲からコロナウイルスの保菌者と思われる、家族を含め心ない対応にあって傷ついたそうです。市の社会福祉開発局に転職予定でしたが、市のロックダウン宣言のため、勤務開始が保留となりました(7月現在もまだ保留中)

担当している奨学金プロジェクトでは、新規申請者の審査、家庭訪問や面接などの業務ができず、辛うじてオンラインで相談対応にあたっていました。奨学金を利用する学生は、パラワン州でも最も貧しい家庭の出身者で、多くの家庭はノーワーク・ノーペイの労働者で、平均的な家族構成は5~8名です。ロックダウン後は生計手段が途絶え、家族全員を食わせることが難しい、といいます。

カッチさん(17期)は、リサール州アンティポロで児童福祉分野の事業に携わっています。スタッフは子どもとの時間を減らすことはできないので、12時間勤務のシフトを組んで、交代で施設に滞在しました。野外での活動はすべて中止、施設内での活動のほか、ダンスセラピーやカウンセリングなど専門職が担当する活動はオンラインとしました。子どもにとってのマイナスの影響は、退所準備ができていない子どもの自立訓練が中断したことだといいます。感染拡大がもたらした“新しい日常”に、子どもがどのように対処できるかは新たな課題です。ロックダウン以降、資金や物資の寄付を受けることが困難となり、寄付金額は昨年と比べて大幅に減少しました。フェイスブックなどSNSを活用してファンドレイジングに努めています。

その他、イメルダさん(13期)からは、フィリピン国内の認定ソーシャルワーカー500名以上によるオンラインでの社会・心理的支援の取り組みが報告されました。また、エナさん(34期)は、マニラ市内でホームレス状態にある人の支援を行っており、映像レポートが寄せられました。住民へのインタビューも収録されています。(※修了生福祉活動助成事業の報告もご覧ください。)

CRIBS FOUNDATION, INC.
 C.Lawis Extension Sitio San Luis
 Barangay San Luis Antipolo City
 Tel: 08-2806896 Mobile no: 09175112742

Stars Impact Award Winner 2016

Help us transform lives.

CASH DONATION **URGENT NEED**

GCash
 SCAN TO DONATE

Account Name: **CRIBS FOUNDATION, INC.**
 Account: **3081-0806-06**

Rice & Milo
 Bonakid 3+ or Nido 3+
 Bearbrand fortified milk
 Hotcake/ Flour/
 Cornstarch/ Honey
 Biscuits/ Condensed milk
 Baby Shampoo
 Disposable diaper Large & Medium
 Adult Shampoo
 Alcohol/ Bleach
 Detergent Powder/ Bar

Thank you so much for your help.

カッチさんの所属財団がSNSで緊急の援助を呼び掛けた

エナさん映像レポートより



子ども3人をシェルターに預けている女性。夫はサイドカーで運送業を営むが今は仕事がないという

韓国



パク

韓国の感染者数は、8月6日現在で14,499名です。そのうちの約半数にあたる6,943名が大邱(テグ)市での感染者です。

(韓国疾病管理本部発表データによる)

大邱で地域福祉の活動にあたっての朴菩提(パク)さん(6期)から、地域住民への支援活動について映像レポートで報告がありました。

パクさん
映像レポートより

パクさんによると、2月末時点では、大邱の感染者数(2,055名)は韓国全体(2,930名)の70%を占めていました。大邱では、地域の研修センターを軽症者の隔離治療場所に指定したり、ドライブスルー診療センターを運営しました。韓国政府は全国民に緊急災難支援金を支給(単身世帯33,000円、4人以上世帯88,000円)、大邱市も独自の緊急生活支援金を支給しました。

パクさんの勤務する社会福祉館では、2月末から6月までに地域住民約9,000名に食料やマスク、生活用品、行政とは別に緊急支援金の配布を行いました。また、電話や訪問相談、家庭で育てられる植物、オンライン学習等、自宅でできる活動を支援しました。募金キャンペーンで個人や企業152名の支援者を得て、連携して活動しています。

パクさんは、「コロナ後、直接的な出会いが少なくなる中で、サービスの提供を続け、住民や関係施設との協力を続けていくには、施設がプラットフォームの機能を果たすべき」と語ります。



国際結婚した人への
ハングル教室をオン
ラインで講義

高齢者への
訪問相談

タイ



サンチャイ



ピック



ソムチャイ



ラットジャイ

タイの感染者数は8月6日現在、3,330名です。3月下旬に発令された非常事態宣言は8月31日まで延期されています。タイ政府は、6月30日付で国際的な人の移動に関する決定事項を発表し、入国できる人の範囲が緩和されました。

(在タイ日本国大使館ホームページより)

サンチャイさん(15期)は、バンコク市内でスラム地域の住民の生活支援にあっており、その状況を映像レポートでも報告いただいています。動画を収録した6月時点では、スラム地域への感染は防がれているとのことでしたが、失業により収入を失った人が多く出ているといいます。軍や民間企業から食料や衛生用品等の寄付があり、それらの物資を配布する業務が増えているといいます。住民たちの委員会でも話し合いをしたり、物資の配布活動をしますが、生活不安や不満の声も多いといいます。

タイからは他に、「他県に出向いての家族支援活動ができず、オンラインで情報提供。おもちゃやマスクの手作り・配布・郵送の活動を始め、資金集めをしている」(ピックさん・22期)、「障害者の多くが職を失い、収入がない。経済的支援やマスク・ジェル等の衛生用品の提供を求めている」(ソムチャイさん・4期)、「活動地域のミャンマーでは外出制限が敷かれ、バンコクの本部からオンラインで利用者のフォローやカウンセリングを実施」(ラットジャイさん・13期)、等の状況を報告いただきました。

サンチャイさん映像レポートより



支援物資の配布

台湾



ウェイピン

台湾では、感染者が少数に抑えられています。8月5日現在の感染者数は476名で、本土の感染者は110日連続で0名となっています。台湾の厚生省に相当する衛生福利部（疾病管制署）は、台湾の感染状況が徐々に安定する中、防疫と生活を両立させるため、段階的に国内措置の緩和を進めています。（公益財団法人日本台湾交流協会ホームページより）

台湾からは、老人ホームで施設長を務めている陳維萍（ウェイピン）さん（14期）の映像レポートを紹介し、ウェイピンさんは、14年前のSARSの経験を活かして新型コロナの感染防止にあたるのが重要であるとして、具体的な対応内容を紹介しています。たとえば、マスクやアルコールなど感染予防の物品は厳密に管理して30日分の備蓄を維持すること、家族の面会が制限されるため高齢者の心理的ケアに配慮すること、施設内に感染予防チームを設置して、定期的なミーティングと利用者の状況の情報共有、などです。

ウェイピンさんはレポートの最後で、「施設の安全のため感染予防が続く、これは大きな挑戦である」と述べています。

ウェイピンさん映像レポートより



食事の提供方法を工夫



マスクなど衛生用品は30日分を維持

スリランカ



ニラーニ



ニシャーント



サンジーク



アーリヤダーサ

スリランカは、比較的感染者数が少ない状況で、8月6日現在の感染者数は2,839名です。5月～6月には、終日または夜間の外出禁止の大統領令が発令されました。（在スリランカ日本国大使館ホームページ、スリランカ保健省ホームページより）

ニラーニさん（5期）は、修了生助成事業の助成による「グリーン・ファミリー」プロジェクトを昨年から継続実施しています。財団本部のあるガンパハ県は一時、新型コロナウイルスのハイリスク地域に認定されました。完全な外出禁止の影響で、人びとの生計手段が崩壊し、食料品供給の悪化、子どもや大人・高齢者がストレスに苦しむ状況が長期化すると見込まれたため、ニラーニさんは、今年度の事業実施地域を、当初予定の地域を縮小し、代わりにガンパハ県を追加しました。プロジェクトの実施スケジュールも3か月程度の遅れが生じたため、ワークショップを短縮して自宅での学習課題を提供して代替するなどの工夫を講じています。

ニシャーントさん（19期）は、映像レポートを送ってくれました。コロポ市内の児童養護施設では、学校が再開しておらず、子どもたちは施設で、テレビで生放送される教育番組を見ながら勉強したり、学校からオンラインで送信された宿題に取り組みます。施設にはコンピュータとインターネットがないため、ニシャーントさんが自分の携帯電話で宿題を受信し、1人ひとりに配布します。外部との連絡が停止しているため、施設への支援が減少したといえます。

その他、「視覚障害学校が休校中で、生徒は在宅でオンラインで学習を行うが、視覚障害のある生徒は難しく、宿題を作成し家に届けている」（サンジークさん・23期）、「所属の財団ではスリランカ厚生省と連携して病院の支援活動を実施」（アーリヤダーサさん・4期）、等の報告が寄せられました。

ニシャーントさん映像レポートより



テレビの教育番組で勉強



「宿題をがんばっています！」

インドネシア



スアルニ



ナンダン



ワワン



ノル



イマ

インドネシアは、アジアでも感染者数が多く8月6日現在の感染者数は116,871名で、政府が大規模な社会制限を実施しています。ジャカルタ首都特別州や、西ジャワ州の5つの県・市（ボゴール県、ボゴール市、デポック市、ブカシ県及びブカシ市）では、大規模社会制限が8月16日まで延長されています。（厚生労働省ホームページ、在インドネシア日本国大使館ホームページより）

スアルニさん（24期）の活動エリアは西ジャワ州ボゴールで、3月から現在も制限が続いています。地滑り災害で被災した女性や子どもの避難村を設け、心理的サポートや子どもが学校教育を受けられるための支援活動にあたるため、2020年度の助成事業に申請しました。ボゴールが封鎖（ロックダウン）され、財団が運営する学校と保育園は閉鎖されました。子どもたちはオンラインで家庭学習に取り組むことになりましたが、インターネットの費用をまかなえない、オンライン学習の方法を知らない、自宅学習の子の面倒をみる等、母親の負担が増大しています。

財団としても収入が得られず、職員の給与支払が滞るなど支障が生じたため、スアルニさんは、布マスクを製造し、オンラインで販売する仕事を始めました。職員のみならず利用者家族にも仕事を分け合い、「わずかな収入を得て食べさせることができた」そうです。

同じく、今年の助成事業に申請したナンダンさん（23期）からは、障害者の状況が詳しく報告されました。新型コロナウイルス感染症が蔓延する前から、インドネシアの障害者は、健康、仕事、社会的支援などの公共サービスにアクセスすることが難しい状況にありました。新型コロナの感染拡大に伴い、その状況が顕著になり、活動地域のバンドゥン市では、約1万人の障害者の8割が職を失ったか休業しているとのことです。食料の確保やマスク等衛生用品の入手、新型コロナの感染予防に関する情報を得ることも困難な状況だといえます。

政府の支援も十分に行き届いておらず、すべての特別支援学校が政府予算での消毒作業ができるわけではない、とのことです。ナンダンさんは、プロジェクトで、民間の特別支援学校（所属財団の運営ではない）や地域の施設の消毒作業を行うことにしました。また、感染予防について障害者に正しく理解してもらうため、パンフレットを作成して配布したり、マスクや消毒液を配布する取組を予定しています。映像レポートもぜひご覧ください。

その他、「利用者の多くは貧困の状況にあり、マスク、消毒剤、ジェル、食料（米、卵、食用油、小麦、ソーセージ）の供給支援が必要」（ワワンさん・19期）、「遠隔地の村や貧しい家庭の子どもは携帯電話やパソコンを持っていないため、オンライン学習に参加できない子がほとんど。所属団体では、子どもや家族を支援するための募金活動を実施中」（ノルさん・18期）、「オンラインのメディアを活用したコールセンター、カウンセリング、情報提供、キャンペーン活動などの活動を行っている」（イマさん・36期）、等の報告が寄せられました。

ナンダンさん
映像レポートより



活動地域ではオートバイも消毒



消毒作業にあたるスタッフ

映像レポートは、全社協ホームページでご覧いただけます。

アジア修了生 映像レポート



右のQRコードを読み取ると
映像レポートのページにつながります。



※他にも多くの修了生から情報が寄せられました。ありがとうございました。敬称略、（）は期
【韓国】パク(20)、ガン(26)、ギョンホ(36) 【台湾】ロ(12)、コウ(28)、ワン(31)、シンイン(36) 【フィリピン】ジュリ(32)
【タイ】チンタナ(3)、メイ(34)、ニー(36) 【マレーシア】パイパイ(36) 【スリランカ】アルナ(26) 【インドネシア】ヤヤット(22)、マーチャ(33)

2019 年度 修了生福祉活動助成事業報告

本事業は、アジア社会福祉従事者研修修了生が行う社会福祉事業等への助成を通じて、アジアの社会福祉の発展に寄与することを目的に実施しています。2019 年度は、4 か国 8 名の修了生の活動を支援しました。2020 年に入ってから、新型コロナウイルス感染症の影響で、内容を一部変更したプロジェクトもみられました。各事業の概要について報告いたします。



「ホームレス状態にある家庭を対象とした生活力獲得にむけた研修」

エナさん (34 期・フィリピン)

ホームレス状態にあって、子どもがシェルターに一時保護されている母親たちを対象に、生計手段を獲得し、生活再建を支援するために、ヘアカット技術やヤクルトレディの研修など職業選択について学ぶプログラムを実施。また、虐待や搾取を防ぐため、子どもの人権についても学んだ。小規模な事業を起業することをめざす者も輩出できた。

新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、起業への助成金支給が延期となった (7 月に支給)。



「健康的な給食提供のための調理の学習」

チンタナさん (3 期・タイ)

学習センターでは、ミャンマーから逃れてきた家庭の子どもたちが生活をともにしている。家庭菜園で野菜やハーブを栽培し、収穫した野菜を使ったベジタリアン給食の調理や、生ごみを堆肥にする技術を学ぶことを通じて、自分で食事を用意し、健康的な生活を送ることや、チームワーク、責任感、他人を思いやる心などを身につけることができた。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、学習センターは 2020 年 3 月から閉校しているが、生徒たちは学習センターで習った技術を生かして、施設で生活する他の子どもたちに料理を提供している。



「健康な生活のための健康的な食事」

マーリーさん (9 期・タイ)

対象地区の高齢者には、変形性膝関節症や高血圧、高脂血症、糖尿病など、高齢者に多く見られる病気をもつ者が多い。その改善に向け、高齢者やその家族、僧侶など地域のリーダーを対象に、生活の質の向上を目的として、健康的な食事について学んだ。桑の葉から作る醤油のワークショップや、自分でひまわりを栽培して、それを調理する料理教室を実施した。参加者同士の良い関係を築くこともできた。



「障害者の心身の健康増進」

アーリヤダーサさん (4 期・スリランカ)

カルタラ県在住の障害者を対象に、身体面だけでなく精神面の健康の増進を図ることを目的としたイベントを開催した。医師等の専門家による健康診断やメンタルヘルスの増進、自分の隠れた才能に気づいてもらうためのプログラムを実施した。孤立しがちな障害者が社会とつながりを持てるようにしたり、また交流を目的とした当事者団体を設立することができた。





「グリーン・ファミリー（持続可能な農業を通じた自立支援）」

ニラーニさん（5期・スリランカ）

活動地域は、極度の貧困状態にあり、腎臓病の多発など住民の健康状態も悪かった。持続可能な農業を通じて悪循環を絶ち、人びとが長期的に健康を保ち、地域の平和、発展を取り戻すことを目的として、次代を担う子どもおよびその親を対象に、環境についてのワークショップや実践的な野外活動、農業視察などを行った。地域の人々は有機野菜を栽培して近隣住民と分け合い、その一部を販売することで収入を得ることもできた。

新型コロナウイルスの感染拡大による外出制限に伴い、いくつかの活動は、政府や保健省が制限を解除するまで延期せざるを得ないものもある。



「廃棄物銀行の利用者などを対象とした所得創出プログラムと社会サービスの提供」

ヤットさん（22期・インドネシア）

活動地域では、2015年から廃棄物銀行（利用者が廃棄物を収集、分別し、銀行に売却することで利益を得る。）のプロジェクトを継続して実施している。この利用者や地域の農家、子ども、高齢者、失業中の主婦を対象に、衣服の裁縫やヤギの糞を活用した肥料づくりの指導を行った。銀行利用者や農家の収入増加を図ることができた。その他、子どもへの本の贈呈、高齢者への健康診断などのサービスの提供を行った。

新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、継続を予定していた活動は、一時的に取り止めとなっている。



「ゴフ県の児童の保護と女性のエンパワメント」

スアルニさん（24期・インドネシア）

女性や子どもを対象に、子どもたちへの暴力の防止や弱い立場にある女性のエンパワメントを目的としたプログラムを実施。女性たちへの定期的なカウンセリングや、児童保護や女性を取りまく課題についての情報提供のほか、児童虐待事例については、専門機関と連携して、必要に応じて照会・送致を行った。グループでのビジネス活動を通じた支援も行った。



「インクルーシブ（包括的）な起業講座」

マーチャさん（33期・インドネシア）

起業を通じて就労の機会を提供することを目的として、バンドン市での起業を希望する障害者を対象に講座を実施。起業家としての意識とマーケティングに関する研修や、公認指導者によるビジネス指導、企業訪問、地域の展示会への商品の出品を行った。6名の参加者がファッションや軽食の提供、工芸分野で起業することができた。

新型コロナウイルスの影響により、起業後に休業したり、売上減などの状況にある者もいる。



※本事業は、1997(平成9)年から毎年実施しており、現在は、公益財団法人日本社会福祉弘済会、公益財団法人毎日新聞東京社会事業団の助成および本会の国際社会福祉基金を原資に助成を実施。2019年度までに、8か国、延べ174団体、総額約5,000万円の助成実績。

